

3. 実践報告・実践研究論文

# カンボジア・ストリートチルドレン・ボランティア研修の 5年間の実践報告

—プログラムの設計、気づきの構造、ニーズへの対応と自省、学びの評価—

牧田 東一<sup>i</sup>

Activity Report of Volunteer Work in Cambodia Program, Training in International Education Course:  
Program Design, Structured Learning Opportunities, Students' Contributions to Local Needs and Their  
Limitations, and Evaluation of Learning

Toichi MAKITA

キーワード：サービスマーケティング、海外体験学習、海外スタディツアー、カンボジア、孤児院

## 1. はじめに

本稿では、基礎教育科目の「国際理解教育」におかれたカンボジア・ストリートチルドレン・ボランティア研修（以下、カンボジア研修）の実践報告を行いたい。はじめに、この科目が海外研修を含むサービスマーケティング科目（以下、SL科目）であるところから、SL科目に関する一般的な論点を簡単に確認したい。

SLには固定的な定義が存在せず、それは今後も変わらないであろうと言われているが、桜井・津止は、彼らの定義を「学生の学びや成長を増進するような意図を持って設計された構造的な機会に、学生が人々や地域社会のニーズに対応する活動に従事するような経験教育の一形式である。省察reflection<sup>1</sup>と互惠reciprocityはサービスマーケティングのキー概念である [桜井・津止2009: 55] 」としている。ここで言う「人々や地域社会」はしばしばコミュニティと言い換えられるが、それは隣人、近隣、地域、国家、国際社会など大小様々に捉えられる多様なものである。

本稿が焦点を当てるのは、上記の定義に即して言えば、①どのような意図を持って（プログラムの学習到達目標、あるいはSL科目としての目標の設定）、②実際にどのように構造的な機会を設計したのか、③人々や地域社会のニーズに対応した活動ができたのかどうか、④学生たちはプログラム参加でどのような学びをしたのか、である。

カンボジア研修は対象コミュニティとして国際社会を設定し、具体的にはカンボジアのストリートチルドレンや孤児院で生活する子どもたちとの経験を通して学ぶことがSL科目としての位置づけである。しかし、「ニーズに対応する活動」と言っても、実際には「ニーズとは何か」、「どうすることが適切なのか」、「学生に出来ることは何か」という根本的な問題があり、海外研修の場合、特に

---

<sup>i</sup>桜美林大学リベラルアーツ学群 教授

専門分野：国際関係論・国際協力

主な担当科目：「国際理解教育（カンボジア・ストリートチルドレン・ボランティア研修）」

「人間理解（人を助けることを考える）」「国際協力入門（NGO論）」「国際協力論」

「国際協力フィールドワーク（日本）」「国際交流論」

### 3. 実践報告・実践研究論文

文化・価値観・開発レベルが大きく異なる途上国では、その問題の困難さの度合いは極めて大きい。

唯一の正解がない問題であり、賛否両論の状況であることが多い。例えば、現在の国際社会では孤児院での療育に否定的な意見が強く、カンボジア政府は孤児院を大幅に削減する政策を行っている。また、孤児院で短期的なボランティアをすること自体が孤児に有害だという意見もある。しかし、一方でそうしたいわば「正論」で本当に現実の子どもが救えるのかという疑問も残る。そうした逆風の中でも必死に孤児院で子どもたちを育てている人たちも多くいるのである。また、学生ボランティアの訪問を好意的に受け止める関係者もいる。学生たちはこうした賛否両論を知りつつ、極めて自省的な活動を余儀なくされる。

## 2. プログラムのカリキュラム上の位置づけ

カンボジア研修は、1～2年生向けの基礎教育科目の一つである「国際理解教育」におかれた6つのプログラムの一つである。全て海外実習科目であり、SL科目に指定されている。

「国際理解教育」がSL科目となった経緯を述べたい。2007年度の学部改組によって、文学部・経済学部・国際学部が統合されてリベラルアーツ学群が設置され、全学の基礎教育を担う教育組織が改組され基盤教育院が新たに作られた。同院が管理する全学共通基礎教育科目群は、外国語や文章・口語表現法などのコア科目および、フィールド科目から成っていた。フィールド科目は2科目で「地域社会参加」は国内、「国際理解教育」は海外でのフィールドワーク活動を含む科目で、それぞれ多数のプログラムで構成された。

本稿執筆時点で「国際理解教育」は「マレーシアボランティア研修」「モンゴル環境研修」「アメリカボランティア研修」「アメリカ福祉研修」「アメリカ幼児教育研修」および本稿で扱う「カンボジア研修」の6プログラムがあり、夏休みまたは春休みに2週間～3週間程度の海外研修がある。また事前研修と事後研修が合計100分×14コマ実施されることとなっている。報告書の作成、報告会の実施なども行われる。

「国際理解教育」科目の目的はその名の通り、海外の国や社会について理解することである。ただしフィールド科目であることから、講義や読書等での二次情報に基づくだけでなく、学生自らが現地へ赴き、自分の眼で見て、現地の人々とのコミュニケーションを通じて、より深く理解することが学習目標とされる。サービスマーケティング科目でもあることから、海外研修は単なるスタディツアーではなく、20時間程度の現地でのボランティア活動が含まれる。本学の建学の精神である「学而事人」<sup>2</sup>の一つの実践として、現地の厳しい状況にある人々のために何らかの活動をすることが求められる。異なる社会、文化、価値観の人々と交わり、違いを理解しながら、同時に、普遍的な「助け合う・分かち合う」精神を学び、態度を身につけるということである。

## 3. ゼミの研修としての始まり

本項では、どのようにプログラムを設計したのか、つまりカンボジア研修のプログラム作成の経緯を述べていきたい。このプログラムはほぼ筆者の手作りであり、元々はゼミの夏休み研修として始まったものである。

筆者が本学に着任したのは2002年4月であるが、2005年の夏休みに3年ゼミ生を対象にゼミ合宿を実施した。カンボジア研修の構成要素は「カンボジア」と「ストリートチルドレン」の2つであるが、何故この2つなのかをまず説明したい。

### 3. 実践報告・実践研究論文

#### 何故、カンボジアなのか

本学に着任する前、筆者は財団法人トヨタ財団の国際部門のプログラム・オフィサーとして22年間、東南アジア諸国への助成活動に携わった。前半は主にインドネシア・マレーシア、後半はベトナム・ラオス・カンボジアを担当していた。特に最後の数年間は、外務省の依頼を受けてユネスコ日本信託基金の資金によるカンボジア王立芸術大学の考古学部・建築学部の再建支援に関わった。最初にカンボジアを訪問したのは1996年であったが、その後ほぼ毎年2回カンボジアを訪れている。

ユネスコ関係者や日本のNGO等に知己があったことと、カンボジア政府の外国NGO等への統制が緩く、活動がしやすいということもゼミ研修にカンボジアを選んだ理由である。それに加えて、科研費の研究調査のために2004年にカンボジアのNGO調査を実施し、相当数の現地NGOを訪問しており、ボランティアの可能性を把握していたことも重要である。その後、ゼミ生がボランティア活動をしたNGOはこの時の調査で知り合った団体である。

筆者は現地の大学、組織等への直接支援に携わっていたことから、学生のボランティア活動は出来るだけ現地NGOに依頼し、カンボジア人と直接関わるのが良いと考えていた。日本のNGOも数多くカンボジアで活動していたが、そうしたNGOに依頼すると、どうしてもカンボジア人との直接交流の機会が少なくなり、現地に滞在する日本人に依存し、彼らの目を通してカンボジアを知ることになりがちだと考える。言葉が通じないハンディはあるが、そのもどかしさも含めての学びであり、外国語学習への意欲にもつながるし、日本語で済ませるのは国際協力というゼミの趣旨に反すると考えていた。それは国際協力を専攻する3年生のゼミ生であるからであり、後に1～2年生向けで全学科目であるカンボジア研修になってからは、カンボジア人の日本語通訳や日本人が運営するNGOでのボランティアという形でハードルを下げている。それでも、見学対象は主として現地のNGOであり、カンボジア人と直接交流し、話しを聞くという方針を一定程度維持している。

#### 何故、ストリートチルドレンなのか

第二の要素である「ストリートチルドレン」は筆者というよりも、学生の興味関心が子どもや女性に向いており、学生の希望を叶えるためにカンボジアのNGOの中で子どもや女性対象のプログラムを実施している団体を選んだのである。希望があれば、コミュニティ開発や地雷除去のNGOを紹介することもあった。

経済発展が続く現在のカンボジアでは、少なくともプノンペンやシエムレアップ等の都市部でストリートチルドレンを見かけることは少なくなったが、2000年代には路上に眠る少年、市場でゴミ拾いや物運びをする少年、外国人とみると物乞いをする少女などがどこにでも見られた。また当時は農村部の少女が騙されて都市部に売られ、売春を強要されるような人身取引が非常に多かった。ポルポト政権による死者200万人ともいわれる大虐殺の時代を生き残った人々はしばしばトラウマを抱え、他人を信用できずに暴力的で、DV被害が数多く見られその被害者は女性や子どもであった。

また、プノンペンの街には多数のスラムがあって、農村部から食い潰して移住してきた貧しい人々が暮らしており、住環境は最悪であり、アルコールや麻薬、犯罪が蔓延していた。そこここにポストコンフリクト社会の様相をみる事が出来た。

#### ゼミ合宿の研修内容

2005年の最初のゼミ研修では、CCPCR<sup>3</sup>、CCASVA<sup>4</sup>、SCADP<sup>5</sup>、AAA<sup>6</sup>の4つの現地NGOで、各団体に2～3名の学生が約3週間のボランティア活動を行った。学生は全て女子学生である。

CCPCRはプノンペン近郊にシェルターを運営しており、そこに売春宿から救出された30～40名の少女たちが自立に向けて、共同生活と職業訓練を受けていた。ボランティア活動の内容は英語等の授業の手伝いであり、一緒に食事を作るなどの共同生活の中で少女たちと様々な交流を持った。

**3. 実践報告・実践研究論文**

CCASVAはストリートチルドレンの保護施設を運営することと、市場で働く子どもへの医療や教育などの路上活動を行なうNGOである。学生はシェルターで保護された子どもの英語教育や一緒に遊ぶなどの活動を行うか、路上で活動するソーシャルワーカーについてストリートエデュケーションや簡単な健康相談の手伝いをした。

SCADPは寺院の境内、ストーパーパの中などで、スラムに住み路上で働く子どもたちのための路上教育活動を行う団体で、学校に行けない働く子どもたちにカンボジア人の若い教師たちがカンボジア語や算数などを教えていた。学生は市内数か所の活動場所で教育活動に参加し、英語や地理などを手製の紙芝居などを使って教えた。AAAは小学生程度の女の子たちにカンボジアの伝統舞踊を教えるNGOで、教師は王立プノンペン芸大の舞踊教師である。AAAで暮らしている孤児の女兒とスラムから通いの女兒がいたが、いずれは観光施設等で踊って生計を立てることを目指していた。学生はこの施設に住み込んで、孤児の女兒たちと一緒に暮らし生活の手伝いをしながら、カンボジアの伝統舞踊を学んだ。

AAA以外で活動する学生はホテルに滞在しており、夜には全員での一日の振り返りを行った。同年代から下の子どもたちとの直接の交流は強い印象を学生たちに与えており、そうした構造的暴力が生み出されるポストコンフリクト社会の厳しい現実、そして不十分ながらも外国の支援を得ながら子どもたちのために活動を続ける現地NGOのカンボジア人たちとの交流は希望と支援の必要性を強く感じさせた。学生たちは現地滞在中から、また帰国後も主として現地NGOを支援することを考え、募金集めの団体を立ち上げて、フリーマーケットをして資金集めなどの活動を行った。

こうしたボランティア活動と同時に、子ども支援や選挙監視、人権擁護などの現地NGOの訪問、また現地で働く日本人の国連職員やNGO関係者、JICA事務所の訪問、青年海外協力隊員などから話を聞く機会を設けた。また、虐殺関係の施設であるトゥールスレイン政治犯収容所博物館、政治犯が虐殺されて葬られたキリングフィールド博物館を訪問した。さらに、第3の都市シアヌークビルまで行き、浜辺で働く子どもたちや孤児院訪問なども行なった。そして、カンボジアの過去の偉大な文化を知るためにシエムレアップまで行ってアンコール遺跡見学も行った。

カンボジアでのゼミ研修に参加した学生の約半数が、その後のゼミ論文や卒業論文で、この時の体験を基にして、子どもの権利、女性の権利、貧困、カンボジアの歴史や政治などをテーマにしている。ゼミの研修には、このように国際協力を学ぶ学生に現場体験と研究テーマを見つける機会を提供する意味もあった。

この最初の年に、ほぼ現在のカンボジア研修の骨格が出来たように思われる。この2005年のゼミ研修以降、4つの現地NGOでのボランティアを中心に学生の人数や希望に応じて、女性支援、コミュニティ開発、地雷撤去などのNGOを追加したり、逆に減らすなどの調整を行いながら、2016年まで筆者がサバティカルで不在の年を除いて、ゼミ研修は現在まで継続している。

以下に述べるように、2015年度から「国際理解教育」の1プログラムとしてカンボジア研修が全学群の1～2年生を対象に始まったことにより、同年度からゼミ研修は形態を変えて、バットアンバンにある孤児院での集中的なボランティア活動になっている。子どもの問題に焦点を当てながらも、幅広くカンボジアの諸問題を見せるのではなく、特定の施設で具体的なプロジェクトを行うプロジェクト指向のゼミ研修となっている。

## 3. 実践報告・実践研究論文

## 4. 国際理解教育のプログラムとして

カンボジア研修は2015年度に開始し、2019年度まで5年連続に実施している。以下では、受講生の実績、プログラムの設計、事前研修、現地研修、事後研修の順に説明していきたい。

## 受講生の実績

表1 年度別・学群別・男女別・学年別受講生数

年度	LA	BM	芸文	健福	GC	女	男	1年	2年	3年	4年	合計
2015	3	-	-	-	-	3	-	2	1	-	-	3
2016	8	3	1	-	-	7	5	2	6	4	-	12
2017	11	2		1	2	14	2	9	5		2	16
2018	9	1		2	4	10	6	8	4	3	1	16
2019	8	1		2	4	13	2	6	1	4	4	15
合計	39	7	1	5	10	47	15	27	17	11	7	62

表1の通りに、受講生の多くはリベラルアーツ学群（LA）の学生であり、全体に占める割合は63%、以下ビジネスマネジメント学群（BM）11%、芸術文化学群（芸文）2%、健康福祉学群（健福）8%、グローバルコミュニケーション学群（GC）16%となっている。女性が76%と多くを占めて、学年は幅広いものの、1年生44%、2年生27%、3年生18%、4年生11%となっており、本来の科目対象である1～2年生が71%を占めている。単位目的履修を防ぐために、4年生の受講には制限をかけているが、単位数から判断して卒業目的でない場合には受講を認めている。女性が多いのは、元々国際協力には女性に関心を持つことが圧倒的に多いが、子どもを対象とするプログラムであることも大きな要因と思われる。男性にも子ども好きは多いが、女性ほどではない。

初年度はプログラムが知られていなかったこともあって3名であったが、その後は10名以上の履修者がいる。引率者1名では多い人数とも言えるが、一方で引率者の航空代など共通経費を学生負担としているため、負担軽減のためには10名以上の履修者が望ましいとも言える。なるべく多くの履修者に参加してもらうのが理想であるが、引受団体の許容量もあり、20名が限度ではないかと思われる。現在の10数名は適当な人数と思われるが、後に述べる安全管理の面からは課題も残る。

## プログラムの設計

以下が、2019年度のプログラムの内容、スケジュールである。

## &lt;事前研修&gt;

- ①カンボジア研修のイントロダクション（Moodleを使ったe-Learning）
- ②カンボジア内戦、ポルポト政権の大虐殺（同上）
- ③カンボジアの歴史と社会、文化（同上）
- ④カンボジアの子どもが置かれている現状（同上）
- ⑤カンボジアの教育の課題（同上）
- ⑥訪問するNGO調べ（土曜日、町田キャンパス）
- ⑦カンボジアの社会問題調べ（同上）
- ⑧ボランティア活動の内容に関する相談（同上）
- ⑨ボランティア活動の内容に関する相談（同上）
- ⑩、⑪カンボジア語集中授業（夏休み、町田キャンパス）

## &lt;現地研修&gt;

第1日 成田出発、夕方プノンペン着

**3. 実践報告・実践研究論文**

- 第2日 王宮、国立博物館、マーケット見学  
第3日 キリングフィールド、トゥールスレインの虐殺関連施設訪問  
第4日 Friends International事務所、NGO専門家訪問  
第5日 CCASVAの活動するスラム訪問  
第6日 日本人の経営する孤児院訪問、学童センター訪問  
第7日 バッターバンへバス移動  
第8日 ノリア孤児院でのボランティア  
第9日 ノリア孤児院でのボランティア  
第10日 ノリア孤児院でのボランティア  
第11日 ノリア孤児院でお別れ会→シエムレアップ（バス移動）  
第12日 アンコール遺跡見学  
第13日 地雷博物館見学、夜エムレアップ発  
第14日 早朝、成田着 解散

**<事後研修>**

- ⑫帰国後、総括振り返り  
⑬報告書作成  
⑭報告会用PP資料作成

報告会、町田キャンパス、PFC、新宿キャンパス、学外報告会

**事前研修**

事前研修の内容はカンボジアの歴史、文化、教育、言語、子どもの現状などの基礎知識と特にポルポト派時代の虐殺、破壊についての理解を持つことである。大量虐殺に単に恐怖心を持つのではなく、何故そのようなことが起きたのかという原因への興味を持つこと、また過去の出来事にとどまらず、そのトラウマ体験が今のカンボジア人にどのような影響を与えているかという、現状と歴史を因果関係で考える方向付けをすることである。これらのことは現在でも様々な研究が行われ原因は多様に考えられるし、現代カンボジアの諸問題も複雑である。つまり、簡明単純な正解はなく、様々な意見を知り、かつ自分でも考えるという態度の養成が重要であると考えられる。

①～⑥までは、2019年度から、新宿キャンパス開校に合わせて、BM学生が受講できるようにビデオ授業で行っている。授業の質問を提出させることで、履修の確認を行っている。⑥～⑪までは、2回ずつ土曜日に集中講義として実施した。これもキャンパス拠点化を踏まえて町田キャンパス以外の学生も受講できるようにという考えである。⑥～⑪で履修者が相互に知り合い、現地研修の前に人間関係を作ることも目的である。

履修者は、（1）記録係（毎日の記録を管理し、報告書作成に備える）、（2）報告会係（報告会で使うPP資料のコンセプト、原稿作成）、（3）ボランティア活動係（孤児院で子どもと行う活動の構想、準備）に分け、全員がどれかに責任を持つ。特に、ボランティア活動の企画では参加者が活発に意見を述べ、また活動に必要なものを準備する中で現地の活動への心の準備と参加学生の役割分担意識を高めることが狙いである。

**現地研修**

プノンペン観光：現地の文化、気候に慣れる意味もあって、最初に王宮、国立博物館、ワットプノム等の文化施設やマーケットの訪問を行う。最初のカンボジアの印象は強いようで、買い物等での現地の人々との交流は学生の記憶に残り、カンボジア文化への印象を形作る。

### 3. 実践報告・実践研究論文

虐殺関係施設訪問：政治犯収容施設であったトゥールスレイン、および政治犯の処刑場であったキリングフィールドの訪問はカンボジアの大虐殺を直接知る機会であり、人類史上まれにみる大虐殺は当然強いショックと何故そのようなことが起きたのかという疑問を学生に与える。

NGO訪問：Friends Internationalという巨大NGOを訪問し、彼らのストリートチルドレン支援の内容、また孤児院ビジネス批判などのブリーフィングを受ける。Friendsはカンボジア生まれのNGOであるが、代表を含めて欧米人のスタッフも多く、欧米系国際NGOの要素も大きい。ここではボランティアは出来ないが、国際的視点から見て進んだ支援の方法やカンボジアの孤児院ビジネス<sup>7</sup>の実態を知り、自分たちがこれから行う孤児院でのボランティアへの批判的な意見を聞くことは、ボランティアへの多面的な見方に気づききっかけとなる。その後、手束耕司氏という日本のNGOの最長老から、カンボジア和平以降今日までのNGO支援とカンボジアの復興・開発について長期的、巨視的視点から講義を受ける。

CCASVAの活動するスラム訪問：CCASVAのスタッフの先導で市内の3か所のスラムを訪問する。CCASVAは事前に地域の警察と自治会に了解を取っている。スラム見学は学生に最も強い印象を与える。臭いやゴミなどの劣悪な生活環境、学校に行かない子ども、アルコール・薬物・賭け事に依存する親たちの姿は、日本では全く目にするものがないものであり、学生は子どもに対する構造的暴力の最も具体的なイメージを持つことになる。CCASVAは大学生のボランティア活動から始まったカンボジア人だけで活動するNGOである。政府との関係、欧米ドナーのこと、カンボジア人が恵まれない子供たちをどう思っているのか、どうしようとしているのか、を知ることが出来る。

日本人の経営する孤児院と学童センター訪問：ここは本研修を主催するHISカンボジア支店の紹介する施設で、プノンペン市内にあり、子どもたちと触れ合えるだけでなく、日本人の関係者から説明を受けることが出来る。事前に様々な情報を得ているため、学生たちの見方は多面的になっており、多様な受け取りが出てくる。日本人ボランティアは住み込みで活動しており、日本人の価値観が活動には出ている。学生は日本人の価値観を相対化する視点を確保できる。

毎晩の振り返り：観光等ではカンボジア人の日本語ガイドが説明をしてくれるし、カンボジア人との通訳もしてくれる。それでも、経験は多様であり、誤解や疑問も多く生ずる。そのため、ホテルに戻ると夜に毎晩1時間以上の振り返りを行い、感想や意見を言い合い、単純な誤解は引率教員が訂正したり、現場で聞けなかった補足説明をして、学生の理解を深めることを行う。多くの学生が、参加者の意見や認識の多様性に驚き、自らの認識や意見の修正や補強を行うことになる。サービスマーケティングにおいて振り返りは極めて重要な学習過程である。

ノリア孤児院でのボランティア活動：カンボジア文化や歴史に触れ、またスラムの子どもたちの実情を知り、支援活動をいくつか見学した上で、実際に自分たちの考えに基づいて孤児院の子どもたちとの活動を企画、実施、評価する。ノリア孤児院はカンボジア人僧侶が主催者となる孤児院である。カンボジアでは寺が孤児を引き取ることは伝統であるが、内戦後の混乱の中で多数の孤児やストリートチルドレンを一人の僧侶が引き取り育ててきた。そこに、日本人のボランティアが住み込みで支援を行っているのがノリア孤児院である。学生たちはカンボジアにおける仏教や僧侶の社会的役割、ボランティア活動の意味や疑問、子どもたちの生きる姿などから、多くの事を学ぶ。

2019年度は切り絵を活動内容として、子どもたちと切り絵作品を作った。学生も子どもたちも満足のいく作品になったと思われる。その他、田植えなどのお手伝い、子どもたちと遊んだり、一緒に昼食を食べたりして過ごす。

### 3. 実践報告・実践研究論文

第三者的に活動を見学し、それぞれに評価することだけでは、やはり他人事になってしまう。自分たちで活動をしてみることで、他団体の活動を改めて見直すことにもなるし、また自分たちの限界（何ができるのか）に気づくことも可能になる。ほとんどの学生は、この時になってもっと事前準備すべきだったと反省することになる。もっとカンボジア語を勉強しておけばよかった、もっと活動計画を詰めておくべきだったなど。ボランティア活動の前後の期間は多くの学生がホテルに帰ってから、話し合いや翌日の準備などで夜遅くまで活動する。

#### アンコール遺跡見学、地雷博物館見学

カンボジアという国の過去の偉大さを知るためにもアンコールワット等の遺跡の見学は欠かせない。しかし、学生の眼は遺跡で働く子どもたちにしばしば惹かれる。おそらくただの観光で来ていたら気づかない児童労働者にまず目が行き、彼らと話し、時には遊ぶようになる。視線が子どもの目線に降りていることは受講生の認識変化の一つの指標である。

地雷博物館見学で、カンボジア内戦のすさまじさ、また対人地雷などの後遺症の実態、地雷除去活動などを知り、改めて虐殺や内戦がいかに深くカンボジアの人々の日常に影響を与え続けているのか、それが間接的に子どもたちに構造的暴力となつてのしかかっているのかを知る。

#### 事後研修

帰国後、日本の環境の中で再びカンボジアで経験したことを振り返り、自らの中で何らかの結論や教訓として受けとめ直す作業が総括の振り返りである。非常に多くの情報と体験があるため、それをまとめて咀嚼するのは容易ではない。学生に共通するのは、自らの与えられた環境の中で自分もまた必死で生きていくべきだという決意に似たものである。その対象は勉学かも知れないし、資格試験やボランティア活動かも知れない。一部の学生は国際協力の現場では自分は力を発揮できないと考え、国内の社会問題に目を転じる学生もみられる。「構造的暴力」は日本にもあると気づくのである。そこそ自分が何かできる場であると考えるのである。

第二に重要なのは、自らの体験や知識、認識などを他者に伝えるという活動である。一つの形は報告書であり、もう一つは報告会である。報告書は活動を正確に記録し、残すこと、その過程で体験を時系列でしっかりと思い出し、記憶を突き合わせて、共同の記録とすることである。記憶はしばしば曖昧で間違いが多い。報告書を作成することで、後に記憶を正しく呼び起こすことが出来る。報告書は関係者に配布する。報告会は、各キャンパスで希望者を対象に実施するが、他者に語り、質問に答えるという行為自体が、振り返りと体験の解釈の重要な過程である。言葉がどこまで伝わるのか、それは履修者にとって場合によっては歯がゆい経験であり、他者に伝えることの難しさを実感する場面ともなる。

## 5. 学習効果

学習効果については、ルーブリックを活用することも行われており、藤原はいくつかの大学の海外体験学習の評価のルーブリックを紹介している〔子島・藤原 2017:第2章〕。学生に評価の基準をあらかじめ提示し、学びの指針としたり、評価の透明性の向上に資するという点では有用性を感じるものの、実際に海外研修の様々な場面において15名程度の学生を観察し、公正に評価することは不可能に近い。引率教員は安全確保、現地組織との連絡等に神経を集中しており、多数の学生の客観的な観察者であることは難しい。部分的に印象に残る学生の態度やパフォーマンスに気づくことはあっても、偶然性に左右されがちであって、公平性には疑問がある。

そこで本稿では、事後研修の際に到達目標に関連した質問への筆記式の回答調査を行い、それを引率教員である筆者が分析する。



### 3. 実践報告・実践研究論文

#### 到達目標

シラバスに記載されている科目の到達目標は以下のとおりである。

1. カンボジアという日本と「異なる文化や価値観の存在」を知り、そうした人々と「交流する」ことの意義を知る。
  2. 子どもという社会的弱者の厳しい実態を知ること、「構造的暴力」の存在を知る。
  3. 子どもを守ろうとする国際機関、NGO等の活動を通じて、「子どもの権利」について学ぶ。
  4. 子どものための活動の実態を知るなかで、陥りやすい間違いに気づき、本当に「意味のある支援」とはどのようなことなのか、を理解する。
  5. 「持たない人々と分け合う」精神を身につける。
1. は「国際理解」という科目の趣旨に関する目標であり、以下のすべての出発点である。2. ～ 4. は「ストリートチルドレン」というカンボジア研修独自の内容に関わる目標であり、「構造的暴力」「子どもの権利」「意味のある支援」がキーワードとなっている。5. は科目というよりは、「キリスト教主義に基づく国際人」という本学建学の精神を具体的に表現したものであり、研修終了後の受講生の長期的な人生指針を示している。

#### 事後研修時の記述式回答

2017年度から事後研修の総括振り返り時に、到達目標に関する記述式の回答調査を行っている。記述式であるため、集計は出来ないが、回答からは以下のように学びを分析できる。

#### 質問1. カンボジア人の価値観や考え方で、日本人と違うなあと感じたことを書いてください。

**宗教：**もっとも多く多くの学生が気づく日本との価値観の違いは宗教である。学生の大多数がカンボジアにおける仏教の役割の大きさに驚いている。それは訪問した寺院でお参りする市民と僧侶との関係、ノリア孤児院での僧侶と子どもたちの関係などから、カンボジア人が僧侶を尊敬し、それに従うことに目を見張っている。また、博物館や遺跡で知る歴史的な仏教とヒンドゥー教の対立や融合から、宗教がカンボジア人の価値観に歴史的に影響を与えていることも理解している。

**秩序・規律、労働姿勢、教育観、公衆衛生、時間感覚：**交通ルールが確立せず、ゴミが散乱し、教育への意識が低く、生活環境の不衛生さ、また店員の非効率な労働態度、時間感覚の緩さなど、日本との大きな違いを感じている。これらは近代化が人々の意識や価値観にもたらす変化であり、先進国と開発途上国の一般的な違いと言える。

**幸福感：**上記の近代的価値観にも拘わらず、人々が笑顔で、自然が多く残り、今を生きることに喜びを見出していることを前向きに評価する学生も多い。将来を考えずに、今を楽しく生きることのデメリットと同時に、日本が過剰に未来のために今を犠牲にしているのではないか、などの近代化のもたらすデメリットも感じており、日本の方が幸福だと単純には言えないと考える学生が多い。

**自立、自尊心：**働く子どもたちが精神的に自立していること、自分たちの文化に対する自尊心を持っていることなど、日本の方が上だとカンボジア人は思っているのではという先入観は間違っていて、互いに対等であるとカンボジア人が考えており、それは正しいということに共感している。

#### 質問2. 価値観の異なる人と交流して良かったと思う点は何ですか？

**価値観の大きな違い：**日本にいても人それぞれ価値観の違いは気づけるが、カンボジアという全く異なる文化・価値観に触れ、人々がそれぞれに幸福に生きていることを知ることから、「当たり前」「常識」「疑ってもみなかった」が実は絶対ではないことに気付いている。途上国の相当に貧しい人々と触れ合わなければ、気づけない価値観拡大の振れ幅である。

**日本の価値観の相対化：**日本的価値観に縛られている自分に気づき、「こんな生き方でもいいんだ」

## 3. 実践報告・実践研究論文

と考えることは、同化圧力の強い日本人にとってはある種の解放感をもたらしている。

生きることの楽しさ：相当数の学生が、日本では大学のために中高を過ごし、就職のために大学を過ごすというように、将来のために今を犠牲にしているのではないかと感じている。今をより良く、楽しく生きることにもっと一生懸命になっていいのではと感じている。

異なる価値観の許容と自分の意見の主張：非常に大きな差異のあるカンボジアの価値観を知ること、またそうした価値観が歴史的にどのように形成されたかを知ること、それを許容する意識が出てきている。それは、日本国内での価値観の違いの許容に転じることができ、また多様な価値観を知ること、自分の世界が広がることの楽しさに繋がってくる。それは、カンボジア人との違いだけでなく、振り返りを通して他の履修生の感じ方や解釈、評価の違いの幅を面白いと感じることとも繋がっており、さらに多様な価値観があるからこそ、自分の意見を述べることの重要性や楽しさの認識にもつながっていく。

**質問3. 子どもの置かれている状況は構造的暴力であると感じましたか。それは、どのような社会構造だと思えますか。**

**貧困の連鎖：**ほとんどすべての学生が構造的暴力だと感じている。今のままでは親の貧困が子どもたちの未来を制約し、親と同じような貧困に陥るだろうという貧困の連鎖を見出している。そこから抜け出せる可能性は教育にしかないと考える学生が大半である。しかし、スラムの子どもたちのように学校に行くことが困難な子どもたちには、自分の未来を創ることが出来ない社会状況があり、それが構造的暴力だと感じている。

**非民主的な政府、理不尽な政策：**何故貧しい子どもたちが教育を受けられないのか、そこには親の問題もあるが、同時に子どもの権利を実現しようとしないうように見えるカンボジア政府の機能不全があり、その背景には権威主義体制を強める現政権の非民主的な性格があることを学生は感じ取っている。また、孤児院の閉鎖という政府の方針が、現実離れしており、孤児院に暮らす子供たちに理不尽な結果をもたらすとも考えている。社会構造から政治の問題へと学生は見通している。

**内戦、虐殺の負の影響：**ポルポト政権の原始共産制を志向する政策によって教師が虐殺され、学校が閉鎖されるなど、親たちが子どもの頃に教育を受けられなかったことが、子どもが学校に行けないことの歴史的背景にあり、また現政権の非民主的な性格も内戦などの歴史的経験が影響していることから、構造的暴力の原因には内戦や虐殺といった歴史的構造もあると感じている。

**質問4. 子どもの権利を守ろうとする活動で、最も印象に残っているのは何ですか。**

**多様な評価：**子ども支援のNGOを5団体訪問しており、うち2つはカンボジアのNGO、3つは日本人が経営に関わる孤児院と学童センターである。学生の意見は割れており、それぞれ性格も規模もミッションもことなるNGOの様々な違いや長所・短所に気づき、評価は割れている。印象が強かったという声が多かったのは、カンボジアのNGOとして始まり現在は他国でも活動する大きなFriends Internationalの欧米的で合理的な支援と実際に学生が活動したノリア孤児院である。Friendsは孤児院養育を批判しており、子どもは親元で育つべきという現在の世界的潮流に従って、子どもを親から切り離さずに家族全体への支援をポリシーとしている。学生の全面的な支持が得られていないのは、こうした新しい方法が果たしてカンボジアで現実的なのかという学生の疑問があるからのように思われる。そのため、孤児院という伝統的な手法で様々な工夫がなされているノリア孤児院や学童センターにも学生の多くが高い評価を与えている。

**質問5. カンボジアで見聞きした様々な支援で間違っているかも知れないと思ったものはありますか。どのような支援が「意味のある支援」だと思えますか。**

### 3. 実践報告・実践研究論文

**理念先行で現実にそぐわない支援：**Friendsを支持する意見の一方で、現状において孤児院の廃止を求めるのは時期尚早ではないか、親元に帰った後のフォローがきちんと出来るのか、などの疑問を呈する声がある。現実には、CCASVAの孤児院から親元に戻った子どもが数か月で行方不明などの実例もあることから、学生は疑問を抱いている。

**支援者の過剰な思い入れと負担：**日本人が経営する孤児院については、日本人の献身的な活動を評価する一方で、過剰な思い入れが押し付けにならないか、また日本人が支援できなくなったときに崩壊してしまわないか、など持続性への疑問の声もある。

**支援者の満足ではなく被支援者の長期的な自立：**自分たちのボランティア活動への反省の視点からは、支援者が満足を得ることが目的ではないことにより自覚的になるべきであり、被支援者が長期的に自立できるように、という究極目標にどれだけ貢献できるかで支援の意味が生まれると考える学生が多い。自分たちの活動がその観点から高く評価できると考える学生はほとんどおらず、むしろ自分たちが得たものはるかに多いと考えている。

**質問6. カンボジアの恵まれない子どものために、自分は何ができると思いますか。**

**自ら学び、力をつける：**多くの学生が今の自分には出来ることは限りなく少ないと自覚している。それは知識・能力や覚悟もなく、ただボランティアをしてもそれは自己満足に過ぎないという自覚もったからである。しかし、何かをしたいという意欲は多くが持っており、そのためには現地について一層深く学び、自らの知識や技能、資格を高め、いつの日か本当に役に立てる人間になる、という認識を持つ学生が多い。

**学んだことを発信する：**ほとんどの学生が今の自分でも出来ることは、体験や知識を口頭やSNS等を介して発信し、より多くの人々に現状を知ってもらうことだと感じている。

**出来ることはある：**今の自分には出来ることはないと考える学生の一方で、小さなことだけれども今の自分でも出来ることはあると考える学生もいる。募金やHP更新の手伝い、ノリア孤児院の子どもとのメール等での交流などである。

#### まとめ

筆者自身が以前述べたように、SLはより深い学び、地域への貢献、市民教育という3要素から成り立っている〔牧田2015:69-70〕。カンボジア研修が履修生に、カンボジアの歴史、社会、文化について教室や本で学ぶよりはるかに深い学びを与えていることは上述の分析から明らかである。学習によって自分自身や自分の所属する社会の価値観との比較をも可能にし、それによって自己の相対化にもつながっている。

一方で、地域への貢献という視点からは、学生自身も感じているが、おそらくその度合いは小さい。桜井・津止が引用しているSigmonの言葉を借りれば、学びが大きく貢献が小さい service-LEARNINGである〔桜井・津止 2009:55〕。しかし、海外研修型のSLにおいて学生が満足する程度の貢献をすることはそもそも極めて困難である。むしろ、望むような貢献が出来ないという気づきこそが重要だと考える。それは、学生の語りの中にあるように支援者の満足ではなく、被支援者の自立こそが重要だということを理解したということである。この程度の活動を高く自己評価したとすれば、自己満足にすぎないという誹りは免れないだろう。

しかし、貢献できないから関わらないと考えるならば、カンボジア研修は失敗であるかもしれない。そこで自分に何が出来るかの考察のなかで、国内の構造的暴力に目を転じるといふ横への視線移動、あるいは自分が力や資格を身に付けて将来役に立てるようになるという時間軸での目標移動が生まれていることは、学習の次なる展開へという継続学習の方向に向かっていると思われる。

第三の市民教育という点について若干触れたい。藤枝は、Eyler, J. and E. Giles Jr. の作成した以下

## 3. 実践報告・実践研究論文

の表を示して、市民教育としてのSLの目標を示している〔藤枝 2017:182〕。

表2 サービスラーニングを通じたシティズンシップ目標の5要素

価値 (Values)	私は、行動するのが当然である。 “I ought to do.”
知識 (Knowledge)	私は、自分が何をすべきか、その理由も分かっている。 “I know what I ought to do and why”
スキル (Skills)	私は、やり方を分かっている。 “I know how to do.”
自己効力感 (Efficacy)	私は、違いを生み出すことができる “I can do, and it makes a difference.”
責任 (Commitment)	私がしなければならぬし、実際に行動する。 “I must and will do.”

〔藤枝 2017:182〕の表11-1をそのまま転用。

学生の記述から、上記のような決然とした発言を読み解くことは、ごく少数にしか見られない。学生の本分である学習、例えば心理学の資格を取る、英語力をつけるなどでは、明確な意思表示をみることが出来るが、社会的課題、さらに地球規模課題への挑戦で、学生がこのような明確な市民的意識と行動意欲を持つことは日本の教育の現状では容易ではない。しかしながら、社会問題への継続的な関心、可能な範囲での参加、情報や意見の発信、また政治参加への意識向上などは可能であり、学生の記述の中にそれらを見出すことは出来る。

## 6. 課題

### (1) 到達目標の設定は適切か

現在の到達目標に関していえば、学生の回答はどの項目についても真剣な学習態度と学習成果が見られると考えている。一方、筆者の専門にひっぱられて国際理解を超えて、国際協力に寄っていないかという疑問が残る。また、1～2年生向けという科目設定からすると、高度すぎないかという指摘を受けることもある。確かに、ある意味では答えのない課題に挑戦しているとも言えるだろう。しかし、異なる国や文化の理解に正解があるとも思えず、興味関心を持ち学び続ける態度が形成されれば良いのではないかと、とも考える。批判的思考<sup>8</sup>の態度を身に付けるきっかけになればよいのかも知れない。

### (2) 専門課程への学びにどうつなげるのか

「国際理解教育」は全学オープン科目であり、現実にすべての学群から履修生がいる。それぞれの専門課程での学びにどのようにつながるのかは、筆者には追いきれない課題である。LA学群で国際協力専攻に進学した学生については、ある程度フォローして、カンボジア研修が専門の学びにどのようにつながるのかについて、一定の想像をすることが出来る。しかし、他学群については専門課程の内容を知っているわけではないので、どう繋がっているのか、あるいは繋がっていないのかは知るべきがない。現実的な方法としては、LAのカリキュラムを想定してプログラム設計をし、その他の学群については学生個人に任せるしかないのではないかと考える。

## 3. 実践報告・実践研究論文

## (3) 安全管理、プログラムの持続性

海外プログラム一般に言えることであるが、特に途上国を対象とするプログラムにおいては安全管理が極めて重要となる。現在は、現地のプノンペンとシエムレアップに支店のあるHISのスタディーツアーデスクが主催旅行社となっており、現地支店には相当数の日本人職員もいることから、通常の旅行業務に加えて一部訪問先のアレンジ、日本語通訳や車の手配、病人が出た時の対応、緊急時の航空券の手配などが可能である。カンボジアの医療事情は、プノンペンとシエムレアップには日本人やタイ人の医師が勤務する高級な病院が海外旅行保険の適用で簡単に利用可能である。過去にも怪我、胃腸炎、軽度熱中症などで受診、入院する学生もいたが、重症化することはなく大きな問題にはなっていない。ボランティア先には日本人のスタッフがいて、アドバイス等のサポートも受けられる。ただ、通院や入院する学生が出た時には引率者である筆者は、その学生に付くことになり、本隊は一時カンボジア人の通訳に任せることとなる。完全なサポート体制を敷くには2名の引率が必要となるが、2週間もの期間人員が割けるのか、またその費用をどうするのが課題となる<sup>9</sup>。

本稿で示したように、現在のカンボジア研修は筆者の経験・知識や人間関係に依存する部分が多い。おそらく海外研修のプログラムの多くは引率教員に依存する部分が多いただろうと思われるが、その意味では教員が代わった後まで持続できるのかは、本プログラムに限らず、海外研修プログラム全般の課題ではないだろうか。

<sup>1</sup> Reflectionは、本稿では「振り返り」とする。

<sup>2</sup> 「学びて人につかえる」という意味で本学のキリスト教主義教育の理念を表し、本学で学ぶことの目的を示している。ここでいう「人」とは他者の助けを必要とする人を指す。

<sup>3</sup> Cambodian Center for Protection of Children's Rightsは1994年に設立。当時、プノンペンとスヴァイリエンに人身売買被害少女のシェルターを持っていた。

<sup>4</sup> Cambodian Children Against Starvation and Violenceは1996年設立。プノンペンに保護されたストリートチルドレンのシェルターを持っていた。

<sup>5</sup> Street Children Assistance and Development Programは1992年設立。プノンペンを中心にストリートチルドレン対象のストリートエデュケーションを行っていた。

<sup>6</sup> Apsara Arts Associationは1998年に設立。孤児や貧困家庭の女の子にカンボジア伝統舞踊を教えていた。

<sup>7</sup> 悪徳経営者が孤児でない子どもを集めて、観光客らから支援金をだまし取るビジネス。詳しくは、岩下明日香(2017) 参照。

<sup>8</sup> ボウウェルとエイソンは、アクティブラーニングに関する著名な本の中で、歴史学におけるクリティカルシンキング(批判的思考)は1. 比較対照の意味を理解し思考スキルを活用する、2. 原因と結果を突き止める、3. 出来事の順序を理解する、ことだと述べている[ボウウェル・エイソン 2017:95]。まさに、学生たちの思考は複雑なカンボジアの歴史と現状の因果関係を考えることであり、クリティカルシンキングであると思われる。

<sup>9</sup> 2019年度には国際センターの職員が前半の行程で引率者に加わった。この期間には通院を要する学生は1名であったが、後半の行程で連続して通院者が3名発生し、筆者のみでの対応には困難があった。

## 3. 実践報告・実践研究論文

## 【参考文献】

- 逸見敏郎・原田晃樹・藤枝聡編著 (2017) 『リベラルアーツとしてのサービスラーニング—シティズンシップを耕す教育』北樹出版
- 岩下明日香 (2017) 『カンボジア孤児院ビジネス』笹ぽんだ本舗
- 子島進・藤原孝章 (2017) 『大学における海外体験学習への挑戦』ナカニシヤ出版
- 桜井政成・津止正敏編著 (2009) 『ボランティア教育の新地平—サービスラーニングの原理と実践』ミネルヴァ書房
- 藤枝聡「第11章 グローバルコミュニティを支える大学生—海外サービスラーニングを通じて学ぶシティズンシップ」逸見敏郎・原田晃樹・藤枝聡編著 (2017) 『リベラルアーツとしてのサービスラーニング—シティズンシップを耕す教育』北樹出版、179–188頁
- ボウウェル、チャールズ／エイソン、ジェームズ、高橋悟監訳 (2017) 『最初に読みたいサービスラーニングの本』海文堂出版
- 牧田東一 (2015) 「桜美林大学サービス・ラーニングの歩美～2011年度から2013年度」『OBIRIN TODAY』特集「サービス・ラーニングの学習効果」桜美林大学